# 令和八年度

# 第十二回平和作文コンクール　作品集

先の大戦で多くの尊い命が犠牲になりました。この歴史的事実を風化させることなく、次の世代に正しく継承していくために、町内の小学五・六年生、中学生を対象に戦争と平和について考え、平和を尊ぶ心の育成の機会として、平和に関する作文コンクールを実施しました。

さつま町ほけん福祉課

最優秀賞　知ることから始まる平和……盈進小学校　五年　吉村　心希

〃　ラーゲリからの帰還……宮之城中学校　三年　原園　詩乃

優秀賞　二人の歯医者の正反対の人生……盈進小学校　六年　福岡　彩恵子

〃　「平和」って何だろう……佐志小学校　六年　谷下　星

〃　相手のことを思いやる世界に……鶴田小学校　五年　手塚　蒼晴

〃　当たり前の毎日を大切に……柏原小学校　五年　曽山　ひまり

〃　若い世代が考える時代……薩摩小学校　六年　段　心優人

〃　特攻記念館で平和について学んだこと…宮之城中学校　二年　木場　李那

〃　知覧特攻平和会館……宮之城中学校　一年　今別府　優月

【最優秀賞】

知ることから始まる平和

盈進小学校　五年　吉村　心希

「すべては知ることから始まる」

この言葉は、私の住む町の九十六歳の戦争経験者の方が大切にしている言葉で、私がこの夏参加した戦争講演会の中で一番心に残った言葉です。

私がこの講演会に参加しようと思ったのは、夏休みに家族で知覧の特攻平和記念会館に行ったことがきっかけです。そこで初めて「特攻隊」を知り、今まで知っていた以上に戦争の怖さ、悲しさを感じました。この町からも、私たちとあまり年の変わらない高校生や大学生くらいの方々が、特攻に行ったというお話や、私の通っている小学校も戦火に見舞われ、食べ物が十分になく、爆弾に怯える毎日だったと聞きました。戦争は、人ごとでも、ただの昔の出来事でもないことを痛感し、胸が苦しくなりました。

特攻平和記念会館には、戦闘機や遺品、写真などが展示してあり、語り部の方のお話を聞きました。どれも目や耳を塞ぎたくなるほど悲しく、すすり泣く人がたくさんいました。私が最も心を打たれたのは、出撃前に家族や友人に宛てて書かれた最後の手紙です。どの手紙も「悲しい、怖い」などの言葉はなく「ありがとう、お元気で、笑顔で行ってきます」など、家族への感謝や思いやりの言葉ばかりでした。特攻で行くということは、たった一つの命を捧げ、もう二度と帰れず会えないということ。そんな時に私はこんな手紙を書けるだろうか、家族を安心させる言葉が書けるだろうか、みんなどんな気持ちだったのだろうと想像するだけで胸が張り裂けそうになりました。

講演会や知覧で学んだ後、私は「やっぱり戦争はしてはいけない。戦争では、誰も幸せになれない」と思いました。それでも今も、世界では戦争で命を失ったり、大切な人を失ったりしている人がいます。私は「平和って何だろう」と考えました。

家族と一緒に過ごせること。おなかいっぱいご飯

を食べられること。安心して朝まで眠れること。学校で友達と勉強したり遊んだりできること。当たり前だと思っていた毎日は、決して当たり前ではありませんでした。

そして、平和のために今の私に何ができるのか、真剣に考えました。相手の気持ちを考えて行動すること。思いやりのある言葉で話し合うこと。周りの人や周りで起きていることに関心を持つこと。自分と違う文化や考えを知り、分かり合おうとすること。そして、戦争について正しく学び、知ったことを伝えていくことだと思います。

三浦さんは九十六歳です。私たちは、戦争を経験した方から直接話を聞ける最後の世代になるかもしれません。だから、私はこの夏聞いた話や感じた思いを自分だけで終わらせず、次の人へ伝え、受けついでいきたいです。

「すべては知ることから始まる」

知れば、考えることができます。考えれば、相手の痛みを思い、自分の行動を変えることができます。平和は一人ではつくれません。だから、目をそらさずに学び、伝え、みんなで平和をつくっていきたいです。日本だけでなく、世界中の人が笑顔で安心して過ごせる平和な未来を目指し、つなげていきたいです。

【最優秀賞】

ラーゲリからの帰還

宮之城中学校　三年　原園　詩乃

今年で戦後、八十一年。シベリア抑留された日本人、約六十万人。その中の一人に、私の曽祖父がいました。

私が小学一年生の時、曽祖父は亡くなりました。葬儀場のロビーに、綺麗な額縁に入った写真付きの賞状のようなものが気になった私は、祖母に興味本位で、それが何かを聞いてみました。するとそれには、曽祖父の戦争体験が書いてあること、そして、少ない怪我で帰ってこられたことが書いてあるのを知りました。当時の私は、戦争がどういうものなのかも知らなかったのですが、少ない怪我で帰って来たということばかりに気を取られ、葬儀場に来たあらゆる人に宝物を発見したかのように自慢していたことを覚えています。

しばらくして私は、曽祖父が戦争体験をしたのを忘れていたのですが、あることをきっかけに思い出しました。それは、去年の八月に戦後八十年特別放送として地上波放送された、二宮和也さん主演の映画、「ラーゲリより愛を込めて」を祖母が録画していたことでした。祖母は真剣な顔で曽祖父も同じ経験をしたというのを話してくれました。

第二次世界大戦が終戦を迎えた千九百四十五年八月十五日、満州に居た曽祖父を含む日本兵、約六十万人が敗戦を知らないまま二十九日までの二週間、懸命に戦い続けました。最前線だった曽祖父は次々と倒れていった仲間を枕に指令が出されるまで夜を過ごすこともあったそうです。ある日、召集された曽祖父達日本兵は、貨車で数週間移動し、零下四十度を超える極寒の環境で、過酷な重労働を強いられます。ここがシベリアのスベルドロフスクにあるラーゲリ（収容所）です。映画ではソ連のインフラ整備の仕事をする様子が描かれていました。曽祖父は必死でロシア語を覚えたそうです。そうしないと仕事がもらえないからでした。シベリアに来て三年経つ頃、六割程分かるようになっていたといい

ます。映画では、祖国に帰れる「ダモイの日」が来て列車で移動したということも描かれています。日本まで後少しの所で停車し「今から名前を呼ばれた者は降りろ」と言われた日本兵達。ここが、運命の境でした。この列車に曽祖父も乗っており、名前を呼ばれなかった曽祖父はシベリア抑留最初の帰還兵となりました。長崎・広島の原爆被害や日本を襲ったB二十九のことは、帰国してから知り、何のことか分からず混乱したといいます。八年後、取り残された日本兵と最初の帰還兵を合わせて、四十七万人が帰国、現地で約五万五千人が命を落としました。戦後、曽祖父は二度と猟をしませんでした。後悔の念から、なかなか戦争の話もしたがらなかったそうです。

私は、曽祖父の信じられない経験と、映画を見て強く心に残ったことがあります。それは、極限状態の中でも失うことのなかった「希望」と「人間らしさ」です。自分自身で精一杯の生と死の間で、仲間と家族のために過酷な環境を生き抜いた人間の強さを深く感じました。曽祖父が経験した戦時中や、シベリアでの生活は、とてもつらく苦しいことだったと思います。曽祖父達の歴史を知った私は、戦争の記憶を単なる過去として終わらせてはいけないと思います。今、こうして過ごせている日々を当たり前だと思わず、今日を精一杯生きることが私にできる第一歩です。

これからは、身近にいる人を大切にし、学んだ平和と私達の命の尊さを次の世代へ繋いでいきたいです。今日や明日が辛くても、何とか生きて、目の前の命を愛して、小さな希望を信じて生きること。私も、そうやって生きていきたいと思います。曽祖父が繋いでくれたこの尊い命を大切に感謝の気持ちを持ち続け、次の世代へと守り続けていきたいです。曽祖父のシベリア抑留の記憶を語り繋いでいくのが、今後の私の役目だと思っています。

【優秀賞】

二人の歯医者の正反対の人生

盈進小学校　六年　福岡　彩恵子

令和八年八月六日、この日、私は父からあることを教わりました。それは、父の祖父、つまり私の曽祖父二人の話でした。

まず、一人目の曽祖父の話です。戦争が起き始めていたころ、周りの人々には「赤紙」が届いていました。しかし、曽祖父にはその赤紙が届かず、不思議に思っていたそうです。その理由は後から分かりました。地いきの中で医りょう関係者は曽祖父ただ一人となっていたからでした。周りの人々が次々に戦地へ行き、命を落としていく中で、自分は行かなかったということ。私はその話を聞いたときに、「行かなくていいのなら、その方がいいのでは。」と思ったのが正直なところです。

しかし、戦争が終わり、日本におだやかな日が戻って来ようとしている時、曽祖父はのどじまん番組を目にしました。その時、アナウンサーの方が歌い手の人にこうたずねました。

「この歌は、友達に届けるのですか。」

すると、こう答えたそうです。

「友達は全員、戦争で死にました。」

それを聞いて、周りの友達を多く亡くしていた曽祖父は、

「ごめんなぁ。おれも戦争に行かなくて。」

と、いつもがんこな人がめがねを外すほど泣いていたそうです。戦争に行かなかった人には、自分の周りにいるたくさんの大切な人を失う悲しみがあるのだということを、そのときに知りました。

二人目は、もう一人の曽祖父です。その曽祖父も歯医者でした。しかし、その曽祖父は従軍歯科医師として、フィリピンやマレーシア、ミャンマーなどいろいろな所に行っていました。その当時は、戦場に麻酔はなかったので、どんな痛い治りょうも麻酔なしでするしかなく、困っていたそうです。毎回、治りょうする人を他の兵士でおさえつけないといけないほどだったと聞きました。

その後、戦争が終わり、ようやく家に帰れることが分かったとき、曽祖父はとてもうれしかったそうです。なぜなら、静岡で働いていたとき、そのまま徴兵されてしまい、家族は鹿児島にいたのでずっと会うことができていなかったからでした。家族の元に帰るまで、戦争で辛い経験をたくさんしてきた曽祖父の思いを考えると、私はなんともいえない悲しい気持ちになりました。

戦争に行かなかった曽祖父と戦争に行った曽祖父。私は、その二人の正反対な人生を父から聞いて、「戦争は、行かなかった人も行った人も心にとても深い傷を負う」ということを感じました。そして、そのような悲しいことはもう決して起きてはいけないと心から思いました。私はこれから先、父から聞いたこの話を忘れません。戦争のことや、平和のことについて、これからも考え続けていきたいです。

【優秀賞】

「平和」って何だろう

佐志小学校　六年　谷下　星

夏。八月十五日が近づいてくると「『平和』ってなんだろう。」と考える。

昭和十六年、日本は、アメリカを中心とする国々と戦を始めた。

「今でも忘れないよ。」ばあちゃんがそっと口を開き、話し始めた。ばあちゃんが四歳の時に戦争が始まったそうだ。空襲警報がなり、飛行機の音が聞こえると、ひいばあちゃんは急いで、四歳だったばあちゃんに、防空頭巾を被せ、雨靴をはかせた。ひいばあちゃんの家の竹山には、防空壕があった。ひいばあちゃんは小さな手をひっぱって必死に走った。

「はよこんか、はよあがれ！飛行機が来る！はよしゃがめ！」

と大きな声で呼び、急いで竹山へ逃げたそうだ。そして、防空壕の中でしゃがみながら、飛行機が通り過ぎるのを待っていた。飛行機が飛ぶたびに、竹が大きく揺れとても怖かった。でも、ひいばあちゃんは、ばあちゃんを必死に守ってくれたと、私に教えてくれた。

「安心した毎日は過ごせなかったよ。」

とつぶやくばあちゃん。私はもっと戦争のことを知りたいと思い知覧特攻平和会館に行った。

約八十年前の太平洋戦争では、特攻基地となった知覧飛行場からは、沖縄に向けて四百三十九人が出撃して命を落とした。日本を守るために若い男性達が戦争に行った。「行っても生きて帰れないかもしれないのになぜ、そこまでして戦争に出撃したの。」と心からそう思った。

特攻隊員たちは、行く前に家族から貰ったお守りや人形などを持って戦争に向かったそうだ。行く時は、

「絶対勝って必ず帰ってきます。行ってきます。」

と笑顔で言った。その笑顔を見る人たちはどれだけ苦しかっただろう。でも、見送る時には、涙を見せ

てはいけないので、いつも顔を見ないで見送っていたそうだ。この話を聞いて、私はとても悲しくなった。もっと家族と一緒にいたかっただろう。やりたいことや夢もたくさんあっただろう。それでも、日本のために命をかけて戦争に向かった特攻隊員の人達の気持ちを考えると、心が苦しくてたまらなかった。見ていると、戦争に向かった人の写真や手紙、洋服、映像が展示されていた。手紙には、

「私が戦死しても沖縄で生きていると思ってください。」

「お母さん、今まで本当にありがとうございました。」

と自分の親や子供、愛する家族に手紙を書いていた。自分が戦争に行くのに自分の親や子供の心配をしている手紙もあった。その手紙を読んでとても優しいなという気持ちと、なぜこの人たちが行かないといけなかったのだろうとも思った。でも、この人たちはきっと「日本のためなら命を落としてまでも戦える。」という強い気持ちがあったのだと、手紙を見て感じた。また、「富屋食堂」トメさんが、特攻隊員たちを我が子のように支えていたことを知り、私も人のためにできる人になり、いつも支えてくれる親に感謝を伝えたいと感じた。

他の国では、まだ戦争をしていて、毎日を安心して暮らせない人たちが、今もたくさんいる。私たちは恵まれた生活をしている。世界全てが平和になることは難しいかもしれない。一人一人の考えが違うからだ。けど、少しでも世界が平和になれば苦しむ人が減るかもしれない。まずは命の大切さをみんなが感じることが大切だと私は考える。

戦争を経験した人が少なくなっている今だからこそ、私たちがその思いを受け継ぎ、次の世代へ伝えていかなければならないと思う。

平和な毎日が続くように、私たちにできることを考えながら過ごしていきたい。

【優秀賞】

相手のことを思いやる世界に

鶴田小学校　五年　手塚　蒼晴

平和とは、ケンカがなくて、みんなが安心して暮らせることだとぼくは思う。

四年前、テレビで戦争についてのニュースを見た。多くの人が戦争で家族や友人、家を失ったのを知り、とても悲しい気持ちになった。ぼくたちは毎日、普通に学校に行ったり、友達と話したり、家に帰っておいしいご飯をお腹いっぱい食べたりしている。それは、ぼくたちにとって当たり前のことだ。しかし、戦争によって、この当たり前の生活を送ることができない人たちが数えきれないほどいることを知り、ぼくらは恵まれていると感じた。

ぼくが平和のために大切だと思うことは、相手を思いやり、傷つけないことだ。そのためには、ぼくだけでなく、みんなが「相手はどう思っているのかな」と考えてから行動することが大切だと思う。

ぼくは、相手の気持ちを考えて行動することを普段から心がけている。「こんなことを言ったら相手は傷つくんじゃないかな」「こんなことをしたら相手はどんな気持ちかな」などと考えて接するようにしている。もちろん、いつも上手にできるわけではない。でも、相手の気持ちを考えるようになってから、以前より、友達や兄弟とのトラブルがずいぶん減った。自分の言いたいことだけを考えるのではなく、相手の立場になって考えることで、ケンカをしなくてすむことがあるのだと分かった。

この経験から、平和は遠い世界の話ではなく、ぼくたちの身近なところから始まるのではないかと思う。小さなケンカをなくすことと世界の戦争をなくすことは、同じではないかもしれない。でも、一人一人が相手を思いやり、相手の気持ちを考えることが、平和につながる一歩なのだと思う。

ぼくはニュースなどで戦争の様子を見て、「かわいそうだな」と思うだけで、実際に戦争を経験したわけではない。だから、その本当の苦しさを知ることはできないけれど、知ろうとすることはできる。

そして、知ったことを忘れないことが大切だと思った。

今、ぼくたちが当たり前に過ごしている生活も、平和だからできることだと思っている。学校に行けること、友達と話すこと、家族と一緒にいられることは、ぼくにとって一番幸せなのだと気付かされた。これまで当たり前だと思っていた毎日の生活が、実はとても大切なものだったのだと気付いた。

ぼくはこれからも、平和について考えていきたい。そして、相手がどう思っているのかを相手の立場になって考えることを大切にしていきたい。世界中の人が安心して暮らせるように、まずは自分から相手を思いやることを続けていきたい。ぼく一人にできることは小さいかもしれない。でも、一人一人の小さな思いやりが集まれば、大きな平和につながっていくとぼくは思う。

【優秀賞】

当たり前の毎日を大切に

柏原小学校　五年　曽山　ひまり

突然の大きなゆれに、私は母にしがみつきました。すぐにテレビのスイッチを入れると、熊本で大地震が発生したことが分かりました。私はとてもこわい気持ち（不安）になりました。

テレビには、地震によって、家がかたむいたりつぶれてしまったり、がれきで道路がふさがったり橋もこわれていたりしていました。電気、水道、ガスなどのライフラインも止まっていました。そして商業施設のばく発事故。

私は、ここに住んでいた人たちは、今夜からどこに住むのだろうと思いました。

平和とは、ただ戦争がないことだけではないと私は考えました。

この地震の報道から考えてみると、当たり前だと思っている生活が、突然失われたら、私は、どうやって生きていくのか不安になります。家族一緒にご飯を食べたり、安心して毎日をすごしたりできることが、これまで、当たり前のようにして生活してる自分がいたからです。

朝起きると、電灯が付いていてクーラーも入っています。家が有り、水が出て、温かいご飯も食べられることは、とてもありがたいことなんだなあと気付きました。

この夏休みに私は、家族とすごす時間を多く作りたいと考えていました。兄や姉は部活動がいそがしくて、一緒に食事をする時間も少なくなってきたからです。以前はみんなでおいしいご飯を囲んで食事するのが多かったと思います。でも最近は、仕事や部活の都合で毎日同じように家族がそろうとはかぎりません。だから私は、一日一日を大切にしたいと思うようになったのです。家族が一緒にいるときは、テレビやけい帯ばかり見るのではなく、話をしたりいっしょに笑ったりしたいです。めんどくさいからまた明日でいいやという気持ちではなく、今できることを大切にしていきたいのです。

戦争も、家族がいっしょにすごす時間をうばうと思います。家族とはなればなれになったり、家を失ったり、安心して学校に通うことができなくなったりしてしまうからです。

平和とは、だれが作ってくれるのではありません。私たち一人一人が、相手の気持ちを考えて、争いをなくすことから始まります。だから私は、家族や友達とすごす時間を大切にし、相手の気持ちを考えて行動したいです。「当たり前」ではなく、相手や周りの人に感謝する気持ちを持ち続けたいと思っています。

平和とは、特別なことではなく、私たちの身近な毎日の中にあるものです。その大切な毎日を守るために、私は一日一日を大切に生きていきたいです。

【優秀賞】

# 若い世代が考える時代

薩摩小学校　六年　段　心優人

知覧特こう平和会館に初めて行ったのは三年前だった。第二次世界大戦末期、追いつめられた日本軍が、飛行機ごと体当たりをする特こう隊で反げきし、多くの若者が命を落とした。この話を聞いたとき、今までにないしょうげきを受けた。なぜ、そんなことをするのか、訳が分からなかったからだ。目で見たり耳で聞いたりしたことを、心の中で整理することができなくなっている自分がいた。押し寄せる重たい情報で胸がいっぱいになった。出げきした若者たちの写真と手紙は、今でもぼくたちに語りかけているようだ。

一年前に長崎原ばく資料館を訪ねた。強れつに目に焼き付いているのは、入り口を入ってすぐのところにある時計だ。十一時二分で止まったままの時計。原ばくの熱で曲がりくねった上、時計のふり子も取れていた。原ばくのおそろしさを物語る事実が、じわじわと体の中まで入ってきた。「長崎を最後の被爆地に」と書いてあった。そして、

「原ばくが落ちて、全て焼けこげて、真っ黒の死体がたくさんころがっていました。」

語り部のおばあちゃんと中学二年生の説明にも心が痛くなった。ものすごい熱の波がおそってきたそうだ。大きなクレーンもぐにゃぐにゃになっていた。鉄がぐにゃぐにゃになるのだから人間なんてひとたまりもないと思った。まるで生き地ごくだ。

「ちょっと、私はここまでにする。」

と姉は原ばく資料館を最後まで見ることができなかった。それほど悲さんな展示だった。原ばくのも型もあった。長さが三メートル以上。この中に放射能がつめこまれていたのだ。地上六百メートルでばくはつした原ばくは、大きなきのこ雲とともに、アイロンのような熱の波を起こした。そして、放射能が辺り一帯をおそった。なぜ、こんなことをしたのか、理解ができなかったが、テレビで、

「戦争を体験したものでないと分からないことが

ある。」

と話した戦争経験者がいらっしゃった。ぼくは戦争経験者ではないが、合点がいったような気がした。

戦争中は、このさつま町にも戦とう機がやって来て、ばくだんを落としたり、じゅうでねらわれたりしたと聞いている。戦争が終わって八十一年。戦争を体験した人たちから、直接話を聞く機会が減ってきた。戦争を体験していない世代が、本気で戦争のない平和な世の中にするためのアプローチをしなければならない。タイミングは今しかない。

世界に目を向けると、ロシアとウクライナ、イランとアメリカなどで戦争が続いている。また、ロケット発射などもたびたびあり、日本の近海に落ちている状きょうがある。戦争のニュースを見るたびに、知覧や長崎を思い出す。胸中の危機感が問いかけてくる。「若い世代が本気で平和について考えよ。」と。

【優秀賞】

特攻記念館で平和について学んだこと

宮之城中学校　二年　木場　李那

私はもともと、特攻隊や戦争の歴史に興味をもっていた。テレビや本などで特攻隊について知る機会があり、命を懸けて戦った若者たちがいたことに驚き、なぜそのような決断をしなければならなかったのかを考えるようになった。特攻という戦法は、敵の艦船に航空機ごと突入するという非常に厳しいものであり、そこには多くの若者の命が失われたという事実がある。私は特攻隊について知るほど、「なぜ彼らは自分の命を犠牲にする決断をしなければならなかったのか」という疑問を強く持つようになった。特攻隊が本格的に行われたのは、太平洋戦争の終盤である。当時の日本は戦況が悪化し通常の戦いではアメリカ軍に対抗することが難しくなっていた。そのような状況の中で、少しでも敵に大きな損害を与えるための作戦として特攻が実行された。そこには「国を守るため」「家族や大切な人を守るため」という思いを持った若者たちがいた。しかし一方で、本当に本人たちが心から望んでその道を選んだのか、周囲の期待や当時の社会の雰囲気によって選ばざるを得なかったのではないかということも考えなければならない。特攻隊員の多くは、私たちと同じような若者だった。将来の夢があり、家族との時間を大切にし、普通の生活を送りたいと思っていた人も多かったはずである。それにもかかわらず、戦争という大きな流れの中で、自分の人生を途中で終わらせるような選択を迫られた。その事実を知った時、私は戦争の恐ろしさを、改めて感じた。戦争は国と国との争いであるだけでなく、一人ひとりの人生や家族の幸せを奪うものなのだと思った。また、特攻隊について学ぶ中で、命をかけて戦った人々をただ「よく戦ってくれた」と評価するだけでは不十分だとも思った。もちろん、極限の状況で仲間や家族への思いを胸に任務に向かった彼らの気持ちを尊重しなければならない。しかし同時に、なぜ若者が命を失うことを前提とした作戦が行われ

るまで戦争が続いてしまったのかを考えることも大切である。歴史を学ぶ意味は、過去の出来事を覚えるだけではなくそこから未来への教訓を得ることにあると思う。私は特攻隊の歴史を知ることで、平和な時代に生きることのありがたさを感じるようになった。現在、私たちは学校へ通ったり、家族や友人と自由に過ごしたり、将来の夢についても考えたりすることができる。しかし、戦争中の若者たちはその当たり前の生活を奪われていた。だからこそ、過去の悲しい歴史を忘れず、平和を守るために何ができるのかを考え続ける必要がある。

特攻隊員たちが残したものは、戦争の悲惨さだけではない。彼ら一人ひとりが抱えていた思いや苦悩、家族への愛、未来への願いも、私たちが受け継いで考えていかなければならないものだと思う。歴史を学ぶことは、過去の人々の人生に向き合い、現在の自分たちの生き方を見つめ直すことにつながる。私はこれからも戦争の歴史について学び続け、二度と同じ悲劇を繰り返さないために、平和の大切さを伝えていきたい。そして、特攻隊について学ぶことは、過去の出来事を知るだけではなく、今を生きる私たちが平和について考えるきっかけになる。戦争を経験した人々の声や残された記録を大切にし、同じ過ちを繰り返さないようにすることが、未来を生きる私たちの役割だと思う。特攻隊員たちが最後まで抱いていた思いや願いを忘れず、命の尊さを考えながら、平和な社会を守っていくとともに、次世代の子たちに「昔の日本の戦時中では大変なことがあったんだよ」と伝えてあげたい。

【優秀賞】

知覧特攻平和会館

宮之城中学校　一年　今別府　優月

私は、昨年の冬、知覧特攻平和会館に行った。

知覧特攻平和会館は、特攻隊の出撃基地であった知覧飛行場の一角に建てられた博物館で、この知覧飛行場からは、沖縄に向けて、四百三十九人が出撃して命を落とした。

特攻とは、爆弾を付けた飛行機にパイロットが乗ったまま、敵の船に体当たりする攻撃のことで、長引く戦争によって飛行機やパイロットの数が少なくなっていた日本は、少ない人数で大きな船を沈めることができる最後の手段として特攻作戦が行われたそうだ。

なかには、パイロット養成所の先生だった人もいて、その特攻隊員は、教え子たちによって寄せ書きされたはちまきをしめて出撃したりもした。出撃しなければならなくなった特攻隊員のほとんどの人が出撃前に家族や友人に宛てた最後の手紙を残した。

知覧特攻平和会館には、戦闘機や特攻隊員が家族や友人に残した手紙、写真、映像、特攻隊員に送られたマスコット人形などが集められて、展示、保管がされていた。

その中には、特攻隊員が実際に身につけていた服やゴーグルもあって、出撃をした特攻隊員の遺影も展示されていた。遺影が展示されていた特攻隊員の中で一番若かったのは十七歳で、ほとんどの特攻隊員が二十歳前後で今の高校生や大学生と同じくらいの年齢の人たちだった。

そもそも、戦争が起きていなかったら、こんなにもたくさんの犠牲者がでなかったと思うし、悲しい思いや不安な思い、辛い思いをする人もでなかったと思う。そして、特攻隊員になって敵の船に出撃したたくさんの人の未来にもいいことや楽しいこと、嬉しいことがたくさん訪れたのかもしれない。

だから、今ある命を当たり前にあるものだと思わずに、死にたくなくても上の人からの命令で出撃し

た特攻隊があったということを忘れずに、これまでに関わってきたたくさんの人やこれから関わるたくさんの人に感謝の気持ちを忘れずこれからも過ごしていきたいと思う。

私は、戦争で学童疎開を経験したことがある人の話は聞いたことがあったけど、特攻についてのことはあまり聞くことがなかった。そして、この知覧特攻平和会館に行くまでは、戦争に関する資料館に行ったことがなくて、小学校の社会の授業や総合学習の時しか戦争に触れる機会がなかった。でも、知覧特攻平和会館に行ったことで、戦争と特攻についてたくさんのことを知ることができた。

今、世界中で起きているたくさんの問題がはやく解決して、世界中が互いに自分の国を高め合い世界中の国がいい方向へ進んでいったらなと思うし、これからは、もう二度と同じようなことを繰り返さないで一生平和な国、世界が続いてほしいと思う。